

個の歌う感覚に焦点をあてた合唱授業の実践とその評価

はじめに

本プロジェクトの目的は、生徒一人ひとりの個性を生かした合唱指導法とその評価について、大学教員と協働して研究を行い、得られた知見を中学・高校・大学それぞれの授業に還元することである。

音楽教育において合唱は、感性を磨き、協調性を養う上で欠かすことのできないものであるが、集団としての指導や評価に重きが置かれ、個人がどうであるかは後回しになり、人数が多くなればなるほど個人の「からだの感覚」がなくなってしまうことが課題として挙げられる。集団の中で個人の歌唱技能や表現力をどれだけ高めることができるのか、その歌唱技能や表現力をどのように評価するのかについて、声楽・作曲分野のプロフェッショナルである大学教員とともに実践を通して検証する1年目とする。このポスター発表では、附属天王寺中学校1年生・2年生の音楽授業実践について報告する。

対象:附属天王寺中学校1年生(1クラス36名×4クラス・古川担当)と2年生(1クラス36名×4クラス・藤原担当) ※以下、「中1」「中2」と表記する。

題材名:「ハーモニーと歌詞の内容との関わりを意識して、のびのびとした声で合唱しよう!」

教材:混声3(4)部合唱「夜汽車」(金沢智恵子作詞/橋本祥路作曲)

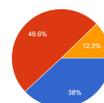
ポイント1 中1・中2 異なる学年が同時に同じ楽曲を学ぶ授業形態

中1・中2混合クラス(中1 18名・中2 18名)で計4回授業を実施。学年別の通常授業形態とミックスさせ、混合クラスの授業がより効果的に働くように工夫した。生徒アンケートの自由記述からは、「他学年に刺激されることによりやる気が向上し、歌唱力も向上すると思うから。」「他学年と一緒に授業を受けるで、今まで考えていなかった視点から、歌詞の意味や曲の特徴について考えることができると思うから。」「2年生は先輩としての意識が高まるし、1年生は先輩から教えてもらうことで技術の向上が図れるから。」など約88%の生徒が異学年混合授業の意義はあると回答した。

	古川担当	藤原担当
1限	中1B音楽	中2D音楽
2限	中1D音楽	中2C音楽
3限	中1C音楽	中2A音楽
4限	中1A音楽	中2B音楽

19 今回のような異学年混合授業は、今後附属天王寺の授業で必要だと思いますか?

276件の回答



ポイント2 北川文雄教授作曲 練習曲(コラール)を毎回の授業の冒頭で取り組む

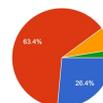
発声練習と実際に取り組む楽曲を媒介するハーモニー感覚を身につけることのできる練習曲を作成した。生徒たちは、約90%の生徒がこの練習曲が歌唱技能向上に役立ったと回答した。具体的にどのような技能が高まったと考えられるかという問いに次の①~③の選択肢の中から回答させた。

- ① 声をのびのびと出せるようになること(発声・呼吸法) 約19%
- ② 音程を正確にとること(ハモる感覚を体得すること) 約70%
- ③ 楽譜を読み取る力が高まったこと(読譜力) 約11%

特に②の技能を高めるためにこの練習曲が有効に働いたと言える。生徒アンケートの自由記述からは、「ハモリの部分で、リズムは違うのにとても揃っているように聞こえた。みんな揃って歌うととても気持ちよかった。」「全員が同じ音からハモるように変わっていくところが気持ちよかった。アカペラで歌えるレベルなので、練習にもちょうどよかった。」「歌詞がないからあまり印象に残らないかなど初めは思っていたが、4つのパートに分かれて歌うときの周りと合奏している感じ、ハモっている感じがとても楽しくて、いつの間にかすんわり覚えていけるような、気づいたら歌っているような練習曲だった。」「地声と裏声を使い分けるのいい練習になった。」「ハモリ始めたら「周りの声を聞く」という力がついた。主張が強すぎてもだめだし弱すぎてもいけないことを体感した。」などの感想が寄せられた。音程を正確に捉える技能が身につくだけでなく、歌うこと・ハモることが気持ちいい・楽しいという思いに至ったと回答する生徒が多くおり、このことは、個の歌う感覚を磨いていく上で重要なことであると考えられる。

今年度は北川文雄先生に作っていただいた練習曲に…。この練習曲は歌唱技能向上に役立ちましたか?

276件の回答



作曲者より

- ・ユニゾン⇒ハーモニー⇒ユニゾンの変化を感じてほしい
- ・主旋律以外のパートの人も自分のパートを楽しんで歌ってほしい
- ・音楽の最小形式である一部形式(8小節)の形式感を体得してほしい
- ・数少ないが臨時記号によるハーモニーの変化を味わい表現してほしい
- ・色々な調で歌ってみることで移調練習にも役立ててほしい



授業で生徒たちがコラールを歌う様子(音声)

Moderato (♩=108) 北川文雄

△長調 (除名唱など)

女声

男声

ポイント3 玉井裕子教授による出前授業「歌唱のための基礎～呼吸と姿勢～」

歌唱時の呼吸についての理解を深めることを目的とし、大学開講「歌唱表現の基礎」の授業内容を中学生版に再構築して、講義をした。呼吸と姿勢が歌う上でどれだけ重要であるかを、解剖図アプリを用いた呼吸メカニズムの理解や簡単な呼吸トレーニングなどを通して学習した。呼吸だけを音楽授業で取り上げることが通常ではない。ある生徒は、次のように感想を述べた。

「呼吸と姿勢は歌う時に大切だということは小学校の頃から音楽の授業で言われていて知っていたけれど、実際に細かく姿勢や呼吸を意識して発声すると、これまで先生方が呼吸と姿勢は大切だと言っていた理由が改めてよくわかった。また、鼻から息を吸ったとき、口から息を吸ったときに体のどこを空気が通っていくかを意識することができた。」

歌の指導は「横隔膜を下げて」「お腹から声を出す」など抽象的な言葉かけが実に多い。横隔膜は下げようと思っただけでできるものではないし、そもそも横隔膜がどこにあるのかすら理解できていない人がほとんどである。今回の講義を通して、解剖学的な視点から「からだ」の仕組みを知ることの重要性とそのことがのびのびと声を出すための助けになることが明確となった。本講義で得たことを生かし、日頃の授業においても解剖図アプリを使用し、実際に自分のからだを触って場所を確認するなどし、継続的に指導していく予定である。

【実技試験】歌唱技能をどのように評価するのか? ～ルーブリックの活用～

実技試験は、4人1組(各パート(ソプラノ・アルト・テノール・バス)1人ずつ)のアンサンブルの形態で実施した。今回3つの観点【声量・発声】【音程・ハーモニー】【音楽表現】を設定し、教員も生徒もこのルーブリックに従い、評価を行った。

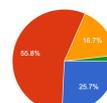
- ①生徒自己評価と教員評価がほぼ同じ(+/-1点以内):約59%
- ②生徒自己評価より教員評価が高い:約8%
- ③生徒自己評価より教員評価が低い:約33%

約6割の生徒(①)が生徒自己評価と教員評価がほぼ同じ結果となり、生徒の自己認識と合致している。課題としては、生徒自己評価より教員評価が低い生徒(③)にどのようにアプローチしていくかである。自分ではできていても、他者から見ると思っていたほど到達できていないということがある。個人としても集団としても歌唱技能をより高めたいためには、まず自分がどのくらいできているのかを客観的に把握する力が求められる。その力を授業の中でどのようにつけていくのか支援の方法を考えることを次年度の課題の1つとしたい。

	S	A	B	C
声量・発声	曲にふさわしい発声を工夫して、声を出ることができている。	声をしっかりと出して歌っている。	声は出ているが、音楽的ではない響き、口元が閉じている発声である。	消極的な演奏である。
音程・ハーモニー	どのフレーズも正確で変化した音程で歌っており、自分のパートの役割を理解していることと、他パートとの調和を意識して歌っている。	全体的に安定した音程で歌えており、自分のパートの役割を理解して演奏することができている。	一部分音程が悪いところがあり、不安定な発声である。一部調子に閉じている発声である。	音程がとれておらず、消極的な演奏である。
音楽表現	リズムや旋律を正確に理解した上で、曲にあった音楽表現を工夫して、表情豊かに歌っている。	安定した拍感とリズムで、曲にあった音楽表現を工夫して歌っている。	一部調子で強弱の変化などはあるが、表情豊かでない。表現が固いが、全体的にはおおよそ安定した拍感とリズムで歌っている。	拍感やリズムを捉えることができておらず、消極的な演奏である。

16 この題材全体を通して、歌うことに対する意識に変化はありましたか?

276件の回答



最後に

今回、上述の3つのポイントをもとにして、生徒自身が楽しみながら歌唱活動に主体的に参加する授業づくりができたと感じている。80%を超える生徒が、題材全体を通して歌うことに対する意識に変化がみられたと回答した。歌が以前よりもうまく歌えたという生徒自身の実感なしには、歌唱授業は深まらない。「どのように歌いたいのか」という思いや意図を表現するための歌唱技能の育成方法について、今後も研究をすすめていきたい。